
喪生児

不足茶野

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喪生児

【Nコード】

N2261B

【作者名】

不足茶野

【あらすじ】

二学期最初の日。双子の姉妹はお互い登校するための準備を始める。一人は朝食の準備。もう一人は人殺しの準備。

……まだ生きてる。いい加減ウザイ。死んでくれよ。
このままじゃあ、また朝になるじゃないか……

1

ワーン、ミンミンミン、ヴィー
うるさいセミの音。それに加え、暑くて寝苦しい。さっきまで静
で涼しかったのに――

「ああ、うるさい……」

ゆっくり意識が戻る。私はまだベッドの上で呼吸をしていた。眠
剤が残っているのか頭がボーッとする。

腕を伸ばしてうつ伏せで寝ていたので、最初にぼんやりする視界
へ入ってきたのは自分の腕だった。

「血が……」

リストカットを繰り返すこと17回目。今度のは一番深く切って
手首の傷は赤くてジユクジユクしてたけど、血は止まっていた。腕
が痺れて上手く動かない……神経やったかな？ ベッドのシーツは
すでに赤いシミが幾つも出来ていた。

意識がはつきりしてくると今度は異臭が私を襲った。思わず顔を
しかめる。部屋は締め切っているので腐った食べ物や汚物を入れた
袋などからの臭いが漏れたのだ。

原因は私が一週間ほど自分の部屋に閉じこもっているからだ。

――もう何もしたくない。

八畳ほどの部屋はメチャクチャになっている。洋服ダンスは倒れ
て、机の上は全て弾き飛ばされ床に散乱していた。鏡台は私の拳で
割れている。もちろん自分が暴れたせいどころなつた。そういえば

指も血まみれだし、腫れてて動かしにくい。

異臭のする散乱した部屋……まるで私の心境のよう。あんな事がなければ、こうはならなかった。幸せな夏休みを過ごすはずだった。傷口を見ながら漠然とそんな事を考えているとドアから声が聞こえる。

「早紀ちゃん、起きてる？」

一番聞きたくない声。私は返事をしない。

「聞こえてるよね？ 早紀ちゃん、出てきてよ」

よくそんな事が言えたのもだ。

私の大切なものをぬけぬけと奪ってにおいて……

夏休み直前のある日、私は彼氏の部屋で妹を見た。

妹に男を奪われる。ドラマや漫画なんかではありふれた出来事に心を乱される。自分自身、そんな事考えもしなかった。

私たちは双子で外見は同じ。しかも、妹の真紀は私の外見に似せてくるのでよく間違われた。

だから双子の私と彼女を分けるものは内面だけ。真紀よりも私は優れた人間だという証明、そう信じていた。

それだけに彼氏が妹を選んだということは人間として彼から否定されたのだと思った。それだけにショックが大きい。

悲しくて、悲しくて……でも周囲には笑って誤魔化した。「しょうがないよ。似てるしね」って。

でも、その歪は私の精神を蝕み、意味も無くイライラしたり、寝つきが悪くなつて病院で眠剤をもらうようになった。だんだん外に出ることが億劫になり、夏休み中はずっと家にいる生活。

そして、残り一週間で二学期が始まることになり、ある決心をして私は部屋に閉じこもった。

リストカットをして眠剤を飲んで眠り、目覚めると生きていることに舌打ちをする。カッターナイフを探し、再び自傷行為に浸った。こんな生活をして今に至る。

なんだか暑くて寝返りをうつと、ベッドから転げ落ちて床に寝転ぶ。

私の部屋はフローリングで触れると冷たくて気持ち良かった。

こんな事に喜びを感じることが出来るのか……私は生きているんだな。

手首からは落ちたショックで傷口が開き、血が流れ出した。痛い。凄く痛い。でも、考えてみればずいぶん消極的な死に方だ。自分でも笑いがこみ上げる。

そうか……もともと死ぬ気なんて無かったんだ。床を滑るように流れる血液の一筋を眺めながら思った。

今なら一週間前に決めたことをできるだろう。

この傷も今回で17回目。とうとう私の年と並んだ。自分の年の数まで傷つけて生き残ることが出来たんだ……実行しよう。

2

目を開ける。まず見えたのは木目調の天井だった。

ベッドの上においてある目覚まし時計を手にとると、アラームが鳴るまであと30分はあった。いつものようにアラームを取り消し、私は自室を出て洗面所へ行く。

髪を洗い、顔を洗う。その後、自室に戻り壁にかけてある制服に着替える。今日から二学期が始まるのだ。

カバンを探し、机を見ると沢山の写真立て。どれもが彼との思い出だった。でも、お姉ちゃんには見せられない。これが原因で彼女は一週間も部屋に閉じこもりきりなのだから。

着替えが終わると部屋を出て階段を下りる。テレビをつけてを見た。この時間の番組はどの局も時間が画面の左上に表示されるから便利だ。

部屋続きになっているキッチンへ向かい、エプロンを付けて朝ご

はんを作る。慣れないことなので何かと時間がかかった。こんなとき早く起きてよかったと思う。前まではお姉ちゃんがお母さんと一緒に朝食を作っていた。私はいつも慌てて起きて来る。

それが我が家のペースであり、私たち双子だった。お姉ちゃんはしつかり者で私はそっかしくてガサツな子。

でも、これからは私がしつかりしなくちゃ。

朝食を作り終わると、早く起きた本当の理由にあたる行動を起こす。私は再び二階へあがった。

二階は私たち双子の部屋しかない。姉の部屋へと向かい、ドアの前に立つ。深呼吸してノックした。

「早紀ちゃん起きてる？」

「……」

返事は無かった。この調子で一週間が過ぎているので簡単には怯まない。

「聞こえてるよね？ 早紀姉ちゃん、出てきてよ」

今までだったら返事はないものの、何かをドアにぶつけてきたことで生きていると分かった。今日に限って何も反応がない。なんだか心配になった。私はドアに耳を近づけた。

しばらく聞き耳を立てていると、何か大きい塊が落ちた音が聞こえた。何かあったのだろうか？ ベッドから落ちたとか？

「——っ、何？ 水？」

さらに足元に冷たい感覚がして下を向くと、私の白い靴下は赤く染まっていた。慌てて足を引く。よく見ると原因はドアの隙間から流れてきた一筋の血液だった。

「ちよつと待つてよ……」

不安が一気に募り、私はドアを激しく叩いた。

「早紀ちゃん！！ 早紀ちゃん！！ どうしたの？ ここを開けてよ——」

まさか自殺！？ 止めて！！ そうじゃないと私——

数え切れないほどドアを叩く。こんな事ぐらいで死なないでよ！
私が我を忘れて殴りつけていると、ほどなく手が空振りをした。
ドアが開いていたのだ。

制服姿の姉は何も言わずドアの向こうに立っていた。観察するよ
うにじっと私を見ている。

「早紀ちゃん、よかった。私、てつきり……」

相変わらず姉は沈黙を通してている。それでも構わなかった。無言
で私の前を通り過ぎ、部屋を出る。階段へ向かい歩き出すと、こっ
ちを振り向かずに言った。

「朝ごはんは出来ているんでしょうね？」

「うん！！ 早紀ちゃんが部屋を出て来てよかった」

私達はキッチンへ向かい、テーブルへ向かい合うように座った。
テーブルにはさっき私が用意した朝食が並べられている。

「ねえ、早紀ちゃん、食べよ？」

「……」

姉は何も答えないどころか、朝食を食べようとしなかった。じ
っとテーブルを見つめている。

「朝食食べたくない？ あっ、それとも先に顔と歯を磨いてくる？」

「……これ」

姉の口が開く。私はちよつと緊張した。

「な、なに？」

「これ、真紀が作ったの？」

「え？ う、うん！！ そうだよ、ヘタだけどね」

「へえ……」

用意された朝食に驚いている様子だった。姉はゆっくり手を動か
し箸をとる。

テーブルの下から現れた手首は痛々しいほどいくつもの切り傷が
あり、私は思わず姉から目を逸らすように下を向いた。傷が痛い
のか時折動きが止まりながらも、おかずの焼き魚に手をつける。

「どう？」

「……うん。おいしい」

「ホント！？ 良かった！！」

私は嬉しくてバンザイをした。でも、それをジッと見つめている姉の視線に気付き、静に手を下ろす。

「焼き魚なんて誰にでも出来るよね」

「そんなことないよ。焼き方は凝れば凝るほど難しいし。お味噌汁も良く出来てる」

姉の表情は無表情なままだったけど、ちゃんと味わって食べてくれていた。それだけで少しだけ打ち解けた気がしてホントに嬉しかった。続けて料理についての他愛のない話をいくつかした。

その後、不意に姉は辺りを見渡した。

「どうしたの？」

「……お父さんとお母さんは？」

「もう、いないよ」

すると姉は大袈裟なため息をついた。

「はあ。いい気なもんだ。娘がこんな事になってるっていうのに。仕事がそんなに大事なの？」

「二人も色々あるから……」

「まあ、丁度いいか。うるさくなくて」

すると、姉は微笑みを浮かべた。

「そうだね。ホント、うるさいから」

私も微笑み返す。

何だか今なら言えそうな気がした。少しずつ呼吸を整え、勇気を出して言葉を吐き出す。

「早紀ちゃん、それどうするの？」

私の視線が自分の腕にあることに気付いた姉はよく見えるように腕を上げた。

「手首の傷のこと？ リストバンドでもしていけば大丈夫でしょ」

「あっ……」

「どうしたの？」

自分の気持ちをちゃんと伝えるべきでしょ？ 私は自分に言い聞かせた。

「早紀ちゃんには悪いと思ってるよ」

「……」

私の気持ち——引け目や負い目——すべて清算したい。新しい自分になりたいから。この朝で全てを変えて玄関のドアを開けたい。姉は許してくれるのだろうか？

「もういいよ、そんなこと」

「……早紀ちゃん」

姉は自分の隣においてあったカバンを取って中を探り出した。

「私、自分の年の数だけリストカットしても生き残ったらしようと思っていたことがあるの」

「何？」

カバンから取り出されたもの。それは血のりで鈍く光る果物ナイフだった。

「真紀、アンタを殺すことよ」

「……」

3

ナイフを見て、真紀は予想外のことには驚き、すぐには動けない。「簡単なこと」

早紀は立ち上がりナイフを前に突き出すとゆっくり近づいた。少しずつ二人の距離は縮まっていく。

「真紀、さっき『顔洗う？』って聞いたよね」

「う、うん」

「洗ってあげる。お前の血で思いっきり……」

早紀は叫び、一気に間合いが詰める。

真紀はその動きの変化につられるように立ち上がり、後ろに下がった。

「きゃああっ！」

ナイフは斜め一閃に真紀の前を通り過ぎて空をきる。机をはさんで向かい合う二人。

真紀は机の縁を両手で掴んだ。早紀は気付かない。

「さ、早紀ちゃん、どうしてこんなことを！」

「お前が悪いんだ、大事なものを奪うから」

「なるほど。そうなんだ……」

「納得してもらえた？」

「早紀ちゃん、こんなこと止めて、って言っても無理だよね？」

真紀は言い終わると同時に机を持ち上げる。机は朝食を乗せたまま早紀へと迫った。

食器は物音を立てて落下し、彼女へ降り注ぐ。空いている手で机を押さえるが、味噌汁やご飯はどうにもならず服を汚す。

その隙をぬって真紀はキッチンを脱出した。

残された早紀はすぐさま机を押し返し、キッチンを出て廊下を出て真紀の後を追うべく玄関へ向かった。

「……殺す……殺す……殺す」

早紀は玄関のドアノブに手をかけている真紀の後姿を見つけると、進む速度を上げた。ナイフを前に突き出し両手に力を込めて突進する。

近づく足音の大きさと真紀は身の危険に気付き振り返ったが、彼女はすでに目の前へ迫っていた。

とつさに横へ飛び退く真紀。ナイフはわき腹を掠める。しかし、完全に避けるまでには至らず、体は早紀の肩にぶつかり弾き飛ばされた。そしてドア横のある下駄箱へ背中を打ちつけた。真紀は一瞬うずくまったが、よろよろとしながらもすぐに立ち上がり今度は

家の奥へ走り去る。

一方、早紀は真紀との接触はあったものの、手ごたえのないままドアへぶつかった。その反動で体が跳ね返り、尻餅をつくように倒れこむ。

真紀が逃げたのを目で追うと、すぐに立ち上がりうとして手を突くが痛みが走り上手くない。ぶつかった際にナイフの柄を持っていた手が刃の部分へ滑ったのだらう。手のひらから地面へ血が滴り落ちていた。

「こんなことで逃がすかよ！」

傷を見て早紀はさらに冷静さを失い、ナイフを怪我をしていない手に持ち替えると真紀の後を追った。

「……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す」

早紀は家中を手当たり次第探し始めた。しかし、物音はどこからみせず気配も感じない。階段を昇る音は聞こえなかった。一階を集中的にあたりをつけて真紀を探す。次々と部屋の扉を開けるが、姿は見えない。窓を開けた形跡もないどころか内側から鍵がかかったままだ。

早紀は前後左右に気を配りながら、とうとう一番奥の両親の寝室へと行き着いた。これが一階最後の部屋だ。早紀は武者震いを抑えながら慎重にドアの手をかける。ノブをひねって扉を押し、すぐには入らずに室内をうかがう。部屋は窓の厚いカーテンのせいで薄暗く、よく見えない。

ドアが開くと同時に光が差し込み全体像が少しずつ見えてきた。

「うっ、何？ この――」

まず、自分の部屋よりもさらに強い異臭が漂ってきた。よほど腐敗したものがこの部屋にはあるに違いない。

さらに何かが横たわっているのが見える。

目を凝らすと徐々に姿をあらわしたそれは――血だらけで重なっ
て倒れている両親の姿だった。

「きゃああああっ！！！」

両親の服には何箇所も刺されたのが破れた後があり、いたるところに血のしみが付いている。皮膚にも血がついているが、それはすでに乾ききってサラサラしていた。

変わり果てた両親の姿を見て早紀の目頭は熱くなった。よく分からない感情がこみ上げてきて吐きそうになる。

「だって……早紀ちゃんがこうなったのも私のせいだなんて言うから」

「——っ！！！」

立ち尽くしている早紀の後ろにはいつの間にか真紀が立っていた。私のせいじゃないのに」

早紀は動くことが出来ない。後ろからの強烈な殺意になす術がないのだ。

「いつもお姉ちゃんが羨ましかった」

「羨ま——えっ！？」

何かが背中に感じる。凄く鋭利な感触。

それは間違いなく真紀が自分に突き刺しているものと分かる。

「すこしでも近づこうと外見をあわせてみても無駄だった。だって内面がまるで違うもの」

徐々に真紀の声が近くなり、耳元に息がかかってくる。

「私は人間性を否定され続けた。いつもそうだったよ……」

「ちよつと待——」

「でも、初めてお姉ちゃんに勝った」

少しずつ増えていく鋭利な感触。感じる面が広がっていくにつれて、背筋が伸びる。

しかし、鋭利なものはお構いなしに背中に刺さった。

「痛いっ！！！」

堪らず、早紀はナイフを後ろへ振った。

しかし、体を動かすと同時に真紀に蹴り倒される。

彼女は室内にへたり込み、ナイフをどこかへ飛ばしてしまふ。

「お姉ちゃんには悪いと思ってる。けど、譲る気はない」

四つんばいになって部屋の奥へと逃げる早紀。少しずつ室内へ追い詰める真紀の手には大型魚をさばく時に使用する巨大な包丁が握られている。

「この一週間、ずっと思ってたんだよ」……まだ生きてる。いい加減ウザイ。死んでくれよ。このままじゃあ、また朝になるじゃないか……』つて」

「くっ、そっ……」

「でも、考えを改めたの」

薄暗い部屋の中で早紀は真紀に気付かれないように手探りで落とした自分のナイフをしている。だが、まったく見つかる気配が無い。「早紀ちゃんが部屋を出て来てよかった。だって私がじかに殺せるでしょ？」

「アンタ、狂ってる」

「それはお互い様でしょ？ ああ、最後に朝ごはんまで打ち解けてホントに良かったと思う。これで私の気持ちも清算されて新しい自分になれる」

早紀はとうとうに部屋の角へ追い詰められた。そして一定の距離を保って真紀は立ち止まる。

「いいよね？ 私たち双子なんだし。考えてることは同じだよ」

「そんなわけないでしょ……」

とにかく手探りで何かをさがす早紀。

真紀は自信たっぷりの表情で彼女を見下ろす。

「早紀ちゃんもろいよ。あんな程度で引きこもるなんて」

「っ！！」

「どうしたの？ 傷ついた？ あはははっ！」

「……私にとっては『あんな程度』じゃない！！」

近くにあった電気スタンドに手が届き、真紀へ投げつけた。怯んだ隙に早紀は這うようにして部屋を脱出する。

このままでは分が悪いと感じた早紀は家へを脱出しようと考えた。なんとか一番距離のある玄関へと走る。近くの部屋にある窓からも逃げられたが、鍵を空けている間にすぐに追いつかれる可能性を考えたのだ。

少し遅れて、後ろから足音が聞こえる。早紀は何とか追いつかれる前に玄関に達し、ドアノブに手をかけた。

「えっ！？ なにこれ！？」

何度ノブを回しても反応が無い。

「嫌だ、開いてよ！ なんで？ なんで？ 開いて！！」

さらに狂ったように先はドアノブを回すが、ドアノブは破壊され使い物にならなかった。

「逃げられないよ。さっき玄関へ行った時、すぐに出られないようにドアを固定しておいたから」

早紀は強烈な恐怖に襲われゆっくり唾を飲む。

少しだけ振り向くと、真紀が薄笑いを浮かべて立っていた。

「早く決着を付けたいの」

「そんな……」

もう逃げられない。そんな諦めが早紀を襲う。

そして脱力しかけた瞬間、あるものが目に入る。

「あれは――」

「お化粧が残ってるから時間がないのよ」

「そうね……」

「どうしたの？ 私に殺される算段でも付いた？」

「違う」

「ん？」

「化粧をしたいのは……私も同じってこと――！！」

早紀はドアの端にある傘立てに目をやり、戦う覚悟を決めた。

「じゃあ、早くしましょう！」

真紀は自分の優位を確信して包丁を振りかぶる。

二人の距離は一気に縮まった。

4

彼女は洗面所で鏡を真剣に眺めている。

前髪的位置を気にして何度も直すが見た目にはあまり変化がない。隣に誰かがいれば「もういい加減にしろ」と言いたくなるほどだ。

十分に時間をかけた後、テレビを見て時間を確認する。丁度いい時間だった。ゆつくりと玄関に向かう。

靴を履きながら倒れているもう一人の彼女を一瞥する。すでに事切れて動くことはない。

「学校へ行くのは一人でいい。もう、同じ顔は二人は要らないから」シミがついた制服を気にしながら彼女は家を後にした。

（後書き）

人稱の変化等がありまして、読みにくかった方がいらっしゃるかもしれません。ごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2261b/>

喪生児

2010年10月8日15時08分発行